

暮らし：家庭

少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 ③



完全雌雄同体として生まれたフロル(左)とタダ(萩尾望都作『11人いる!』)

少女マンガに限らず、メディアにおけるジェンダーを考える際、我々はいかにそのコンテンツに何が描かれているのか」ということに注目しなくては。確かにそのメディアが男女を「平等に」描いているのか、ということも重要である。だが同時に、「何が描かれていないのか」ということにも着目する必要がある。

少女マンガの世界ではこれまでにもさまざまな作品が描かれてきた。それらの作品の主題の中には、現在では当たり前のように読むことができるものの、初期の頃にはまったく描かれていないものも少なくない。

第2回で

はその一つとして、「歴史」を少女マンガの主題とした『ヘルサイユのぼら』

萩尾望都の世界

宇宙や科学を「勝ち取った」

を取り上げた。今回は「SF」を取り上げる。性役割の違和感

『11人いる!』(1975年)は「宇宙大」という名門校の最終試験を描いた作品である。受験会場である宇宙船には本来10人しか乗っていないにもかかわらず、なぜか受験生が11人いる」というところから物語は始まる。作品には異なる容形・言語・社会・文化・歴史を持つキャラクターが多く登場する。その中にフロルという名



星(セイ)は、火星人であることを隠しながら、地球で暮らしていたが……(萩尾望都作『スター・レッド』)

の、「完全雌雄同体」で生まれ成長期の段階で男女いずれかになる人物も描かれている。フロルは「女性の文化が発達している」という自身の星について、次のように総括する。「女はきれいだよ、外見はね、でもそれきりだもん(中略)兄上の成人式が一番すてきたんだよ、やっぱ生まれながらには男になつて、あれくらいチャホヤされてみたいや」。

「少女」には無縁 70年代頃より、こうしたSFを主題とした作品が少女マンガには登場するようになってきた。だがここで強調したいのは、少女マンガはこれに止まらず、SFという主題を「勝ち取った」ことである。これ以前には、宇宙や科学は「少女」向けの読み物の主題としてほとんど考えられていなかった。その歴史を遡ると戦前の少女小説にまで至る。宇宙や科学はあくまでも「少年」のためのものであり「少女」には無縁のものであるという認識が、作家や編集者を含む社会全体のジェンダーとして存在していたのである。次回「男女の恋愛」を描いた最初の女性作家である水野英子を取り上げる。(日本出版学会理事・大学講師) (金曜掲載)

男女の性役割に対する違和感を、端的に表現しているセリフであると言える。

男女の性は生まれながらにして固定的なものではない、という設定は、『スター・レッド』(78年)(左上)にも登場する。物語の終盤、主人公である星が、男性であるヨダカの体の中へ「小さくなって入り込む」というシーンがある。ヨダカが星を取り込む時に言う。「ほくは少しだけからだをかせればいい。その変化はわずかのエネルギーで足りる。子どもを産む女の方からだに……きみはあとで新しく生まれればいい(傍点筆者)。あくまでもSFというファンタジックな世界観の中で描かれたものではあるが、「男女の身体差はさほど大きなものではないのではないか」という萩尾の問いかけは、圧倒的な男女差別のある現実社会に巣立っていかねければならない少女たちに対するメッセージであったのかも知れない。